

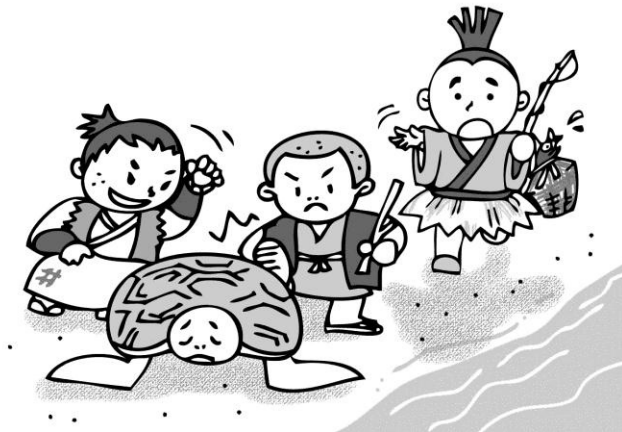
うらしまたろう

むかしむかし、あるところに、うらしまたろうという若い漁師がいました。漁師の仕事は、魚をとることです。毎日、魚を釣ります。そして、釣った魚を町に売りに行っています。売った少しのお金で、お母さんと二人でくらしていました。

ある日のことです。子どもたちが砂浜で、いっぴきの亀を棒でたたいたり足でふんだりしていました。

「へんなかめ～」

「あっちいけー！」



うらしまは子どもたちをとめて、言いました。

「これこれ、亀がかわいそうですよ。そんなことをしないで。」

「うるさいな！」

「そうだ、そうだ、じゃまするな！」

子どもたちは、また亀を足でけったりしました。

「じゃあ、お金をあげますから、その亀を私に売ってください。」

「あ、金だ！」

「うん、わかった！はい！」

「じゃあね、お兄さん！また買ってね！」

子どもたちはお金をもらおうと、どこかへ行ってしまいました。

そのあと、うらしまは亀をなでて、言いました。

「やれやれ、あぶないところでしたね。さあ、早く海へ帰りなさい。もうこの砂浜へ来

ないほうがいいですよ。」

亀は、海へゆっくり歩いていきました。水に入る前にうらしまを見ました。そうして、

ゆっくり泳いでいきました。

数日後、うらしまはまた船にのって、海へ釣りに出かけました。一生懸命魚を釣っ

ていると、声が聞こえます。

「うらしまさん、うらしまさん。」

「え？だれ？どこですか？」

「私です。先日、たすけてもらった亀です。」

亀がそう言ったので、うらしまはびっくりしました。

「あの日はありがとうございました。お礼をしたいです。うらしまさん、あなたは

竜宮城というおしろを見たことがありますか。」

「竜宮城？いいえ、聞いたことはありませんが、見たことはありません。」

「じゃあ、私が連れていきます。」

「ぜひ行ってみたいですが、竜宮城は海の底にあるんですよね？どうやって行くん

ですか。私^{わたし}はそこまで泳^{およ}げませんよ。」

「心配^{しんぱい}しないで、私^{わたし}の背^せ中^{なか}に乗^のってください。」

うらしまは少し心配^{しんぱい}でしたが、亀^{かめ}の背^せ中^{なか}に乗^のって、海^{うみ}の中^{なか}をどんどんもぐっていき
ました。

海^{うみ}の中^{なか}では、太陽^{たいよう}の光^{ひかり}がキラキラ^{きらきら}していて、いろいろな色^{いろ}のサンゴ^{さんご}が見^みえました。

そしてオレンジ^{おれんじいろ}色の魚^{さかな}がまわりを泳^{およ}いでいました。

しばらくすると、海^{うみ}の中^{なか}に、キラキラとかがやく竜宮城^{りゅうぐうじょう}が見^みえました。

「あれが竜宮城^{りゅうぐうじょう}です。さあ、どうぞ。」

「わあ！きれいですね。」



おしろでは、たいへんきれいなおひめさまが、うらしまを待^まっていました。

「うらしまさん、ようこそ。私^{わたし}はおとひめです。先日^{せんじつ}は、亀^{かめ}をたすけていただいてありがと

うございました。どうぞ、竜宮城^{りゅうぐうじょう}でゆっくり休^{やす}んでください。」

おとひめがそう言^いうと、女^{おんな}の人^{ひと}がつぎつぎにごちそうを運^{はこ}んできました。

「どうぞ召^めし上^あがってください。」

「わあ、すごいごちそうだ。いただきます。・・・おいしい！こんな料理、食べたことがありません。」

「たくさん食べてくださいね」

つづいて、おとひめが

「魚たち、踊ってください。」と言うと、魚たちがめずらしいおどりをはじめました。

「おもしろいおどりだなあ。」

ごちそうは、つぎの日もつづきました。うらしまは、海の中のきれいなところを見に行ったり、いかやたこのおどりを見たりしました。

ある日はたこの家に行きました。たこの家には扉が8つあって、屋根には赤い目がついていました。

「たこさん、どうしてお家に扉がそんなにたくさんあるんですか？」

「それはね、まごが8人いるからのう」

「そうですか！」

次に、うらしまは屋根にある赤い目を見て、おもしろいと思いました。

「たこさん、あの目は何ですか？」

「ああ、あれは目じゃない。灯台じゃ。海の下が全部見えるぞ。行ってみるかい？」

「はい、見たいです！」

「じゃあ、亀を呼ぶから、一緒に乗ろう。亀、こっちに来い」

そして亀が来て、たことうらしまを乗せて、灯台まで運びました。

灯台からは、竜宮城も見えて、海そのこの山やめずらしい花も見えました。

「すごいですね」

+++++

その後、竜宮城に戻りました。

「こんどは四季の景色を見せましょう。」

おとひめはそう言って、まず、東のとびらを開けました。そこは春のけしきで、うつくしいさくらの花がさいていました。

「わあ、きれいですね。鳥の声も聞こえます。」

次に、南のとびらを開けると、そこは夏のけしきで、ひまわりが元気に咲いていました。

次に、西のとびらを開けると、そこは秋のけしきでした。赤や黄色の紅葉のじゅうたんが広がっていました。

最後に北のとびらをあけると、そこは冬のけしきで、真っ白な雪がつもっていました。

うらしまは何を見ても、おどろいていました。

「ここは、とても楽しいところですね。まだまだ帰りたくないです。」

「では、帰らなくてもいいですよ。ずっとここにいてもいいです。」

「… …」

毎日おもしろくて、めずらしいことがつづいて、あっというまに、3年がすぎました。

うらしまはときどき、ふるさとの夢を見ました。

「お母さんは、いま、どうしているだろう。」

そう思うようになりました。もう、歌を聞いても、おどりを見ても、楽しい気持ちにな

りません。

おとひめは心配して、

「浦島さん、大丈夫ですか。」と聞きました。

「じつは、そろそろ、家に帰りたいんですが…。私のお母さんが、しんぱいしています。」

うらしまは、おとひめに言いました。

「そうですか、ざんねんですがしかたがありません。」

おとひめはそう言って、きれいな箱を持ってきました。



「このおみやげを持って帰ってください。これは玉手箱という宝物ですが、ぜったいに開けてはいけません。」

「玉手箱？」

「はい、中に人間の一番大事な宝が入っています。でも、ぜったいに開けてはいけませんよ。」

「はい、わかりました。ありがとうございます。お世話になりました。」

うらしまは礼を言って、竜宮城を出ました。

かめ すなはま おく
亀が砂浜まで送ってくれました。

かあ なに げんき
「お母さんは何をしているだろう。元気かなあ。」

うらしまはお母さんとの会話をおもいだしました。うらしまが釣りの仕事から帰った
ひ
日のことです。

かあ きょう いっ
「お母さん、今日は1ぴきだけでした。ごめんなさい。」

さかな はん
「わあ！いい魚！おいしいばんご飯になるわね。」

きょう う さかな
「でも、今日売る魚がありません…。」

だいじょうぶ あした と いっしょ はん つく
「大丈夫。明日はきっと取れるわ。さあ、一緒にご飯を作りましょう」

うらしまはご飯をたいて、お母さんは魚をやいたあと、一緒に食べました。

「うん、おいしいね。がんばったね、たろう。いつもありがとう」

と、お母さんは言って、うらしまの頭をなでました。

かあ
「お母さん…」

うらしまは、家まで走りました。でも、へんです。知っている人がぜんぜんいません。見
たことがない家や店があります。

そして、自分の家の場所に着きました。ところが、家がありません。

「どうしたことだ。私の家がない。お母さんはどこに行ってしまったんだろう。」

ひとり とお
そこへ、一人のおばあさんが通りました。

「おばあさん、うらしまたろうのうちは、どこですか。」

うらしまはおばさんに話しかけました。

「え？うらしまたろう？聞いたことはありませんね。」

「いいえ、いいえ！ここに住んでいましたよ！」

「うらしまの家…。こんな話がありますよ。むかしむかし一人のわかい漁師がいたが、ある日、海に行き行って帰らなかった、それでお母さんは悲しくて悲しくて、死んでしまったそうですよ。」

「ええっ、お母さんは死んでしまったんですか。」

「でもそれは、300年も前の話ですよ」とおばあさんは言って、あるいていきました。

「え？300年？私が竜宮城にいたのは3年だけですが…」

竜宮城での1年は、こちらの100年でした。うらしまは泣いて、海にもどりました。

「だれもいません。竜宮城のことは夢ですか。この玉手箱を開けたらむかしにもどれるかもしれません。」

うらしまはおとひめの話を忘れて、玉手箱を開けました。

はこの中から、白いけむりがもくもくもくもく。でも、箱の中には何もありませんでした。

手を見ると、おじいさんの手になっていました。足も、顔もしわしわになっていました。

髪も白いおじいさんになっていました。

箱の中にあつたのは、うらしまが竜宮城にいた時間でした。

